

『在宅における小児のリハビリ』～補足資料～

講師：直井寿徳（スマイル訪問看護ステーション 理学療法士）

<スライド5>

右上の写真はOT、夏になるとプールをやる。相談支援員のお仕事もしている。

<スライド6>

自宅は練習の場ではなく、生活の場なので、生活の中でできることを探していく。

<スライド8>

気切をしているからうつ伏せになってはいけない、ではない。気切に気をつけながらうつ伏せをする。できる方法を探り、伝えていくことがサポート側の仕事。

<スライド9>

子供の仕事＝遊び、だからこそ、遊ぶ環境をデザインする。

<スライド10>

※写真）リビングにカーシートを持ち込んで遊ぶ子供。

（前方に椅子、椅子の背にテーブルを取り付けて、そこに遊び道具を置いて遊んでいる）

以前は、膝上にクッションを置いて、その上に遊び道具を置いて遊んでいた。その方法では床に落としてしまうので、写真のような工夫をした。

ポジショニングが非常に大事。筋力トレをしなくても、しっかり遊べるポジショニングができれば、遊びながらの筋トレになる。

<スライド11>

子育て支援＝親を教育していくことでもある。

<スライド12>

幼児言葉→大人言葉（例：ぶーぶー→車）への覚え直し、再学習は、障害を持った児にとっては非常に大変。であれば、最初から右手は「右手」として教える。そういう声かけをする。

<スライド13>

※別紙く＜な＞の独り言参照。（別紙記載 URL は講師ブログ）

ワンパターンの動きを崩し、ワンパターンでない運動を生活内に取り入れる。

<スライド15>

正解はボード遊び。この遊びの間は、頸部の維持ができる。

<スライド16>

ひとりの人間として信じてあげて、不安になっている親御さんにも「信じてあげましょう」と伝えていく。

<スライド19>

※(動画)筋肉の短縮はあるものの、両手の自動運動ができるようになった。

<スライド24>

セラピストが行ったその時にしかできない遊びではなく、そうではない時にもできることを探っていく。

<スライド 27>

仮説を立てる→評価する、というプロセスを大事にすること。

痛い?→痛くないようにする。(可動域制限の有無は?柔軟性向上のアプローチは?)

母親から離れた不安?(1階で脱衣、看護師がお風呂の用意、母親が脱衣係)

生活支援をしに行くのだから、どうやったら過ごしやすいか、の仮説をたくさん立てる。

<スライド 45>

運動学習ができる!というところまで持っていく。

<スライド 46>

本当はここまでやるのがリハ職の仕事。

<スライド 50-51>

これは講師自身の考えも多少入った表。

母親のタイプに応じて考えなければならない場面ももちろんあると思う。

また、時期に応じて視点をしっかり切り替え、児の社会参加について考える機会も出てくる。

<スライド 54>

障害児が作業所で稼ぐ給料は、1ヶ月約300円程度。

なので、訪問見学をさせてくれた児に、プロの障害児者モデルとして見学料を支払っている。

講師は日本身体障害者水泳連盟の役員をしており、そこでも児への余暇活動や仕事の提供活動をしている。

【質疑応答】

■児の就学する学校との連携の仕方は?

→学校もわからない状況でやっているのだから、直接出向いて意見交換がよいのでは。

■ADHDで、障害ゆえの症状が徐々に学校で問題になり始めている、学校宛に手紙を書こうと思うが、良いと思うか?

→手紙を書くのであれば、専門用語は絶対に書かないこと!

■車椅子とHOTで通学しており、介助者、本人ともに疲労大で困っているのだが…

→HOTを軽いものに変更してみてもどうか?

■母親からの愁訴「この子は将来どうなるのか?」にどう返せばよいか?

→まず親子との信頼関係が築けていること。介入を通して、セラピスト自身に、児の将来の生活状況のイメージが持てるようになってから、そのイメージを徐々に伝えていく。合わせて、「今できることはこれです」ということもしっかり伝えていく必要がある。

■16歳高校生・特別支援学校就学・進行性の難病だが、今後どう関われば良いか?

→学校とも相談して、似たような境遇の先輩、後輩など、仲間づくりをしていく。合わせて、今のリハビリが「何のためのリハなのか」も毎回の介入を通してしっかり伝える。

■小児STってどんなことをするのか?別事業所のST介入を考えている、と母親から相談を受けた。

→STもそれぞれ強みがある。「コミュニケーション」か「嚥下」に二極化するSTが多いので、何を目的にSTを依頼したいのか、明確にして介入相談に行くことの必要性を母親に理解してもらう。「やったら安心」に陥ってしまわないようにすること。

■管理者より、「子供に慣れたセラピストを寄越してほしい」と言われる

→経験の有無ではなく、「子供と仲良くなる」こと!

仲良くなり、リハを受けている様子を母親にも見てもらう。そういう環境づくりをする。